

ホルムズ海峡に面した南東アラビア北端部の歴史を紐解く

—オマーン、ムサンダム北部地区における考古学調査(2025年)—

近藤 康久 総合地球環境学研究所教授
黒沼 太一 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教
田邊幹太郎 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程

Exploring History of the Northern End of Southeast Arabia Facing Hormuz Strait: Archaeological Surveys in Northern Musandam, Oman in 2025

KONDO, Yasuhisa Professor, Research Institute for Humanity and Nature
KURONUMA, Taichi Assistant Professor, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies
TANABE, Kantaro Doctoral student, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo

近藤
康久
黒沼
太一
ほか

1. はじめに

アラビア半島南東部の、ホルムズ海峡に突き出た地域を、ムサンダム半島という。ムサンダム半島ではハジャル山脈が海峡に沈み込み、リアス式海岸を形成している。半島の北部はオマーン領の飛び地、ムサンダム特別行政区である。近年、その南東岸のダバ・アル＝バヤア(Daba al-Bayaah)遺跡において紀元前2~1千年紀の集葬墓が発掘された(Frenez et al. 2020; Genchi 2023)。しかし、ムサンダムは総じて交通が困難なこともあって、1960年代にベアトリス・デ・カルデイ(de Cardi and Doe 1971)、80年代頃にパオロ・コスタ(Costa 1991)、90年代にパオロ・ピアジ、2008年にジェフリー・ローズ(Rose 2008)らのチームが遺跡分布調査を散行したにとどまり、地域文化の考古・歴史的な全体像がまだ明らかでない。そこで筆者らのチームは、ムサンダム北部地域の考古・文化的景観の長期変化を解明することを目的として、2024年3月に遺跡分布調査を開始した。初年度には、西岸のブハ地区において、集落遺跡や積石塚を確認した(近藤他 2025)。本稿では、2年度目にあたる2025年2月の調査成果について報告する。

2. 2025年遺跡分布調査の概要

筆者らは2025年2月3日から11日にかけての9日間、ムサンダム北部の中心都市ハサブを拠点として、西海岸のブハ地区と、ハサブの南郊、さらに中央山地

(ルウス・アル＝ジバル Ru'us al-Jibal)を南に越えた内陸山間部のワーディー・アル＝ビィ峡谷(Wadi al-Biyh)において遺跡分布調査を実施した(図1)。ブハ地区は、アラブ首長国連邦ラス・ル＝ハイマ首長国に続く海岸道路が整備され、アクセスが容易であるが、中央山地を縦貫する未舗装道路は、昨年は土砂崩れのため通行できなかった。この道路は復旧したが、ワーディー・アル＝ビィまでは悪路が続くことに加え、国境に近く軍事施設が存在する等の事情から、事前に関係当局の許可を取り付けた上で、ムサンダム遺産観光局の職員が運転する公用の四輪駆動車で現地に入った。

3. ハラートゥ・ル＝ジャッダ集落遺跡の遺構確認調査とワーディー・グムダの洞穴調査

昨シーズン、西海岸のグムダの町外れに、ハラートゥ・ル＝ジャッダ(Harat al-Jaddah、遺跡番号WGD01)という集落遺跡を確認した(図2)。この遺跡はワーディー・グムダ(Wadi Ghumdah)峡谷の支谷沿いに約700m続き、上流側と下流側の2つの居住区に、石積住居址、街路、墓地、そして現地でワアブと呼ばれるテラス状の石囲いなどが設けられ、さながら小都市の観を呈している。今シーズンは、上流の2つの涸れ谷(ワーディー)が合流する地点の近くと、下流の南東側の一角で、アクションカメラGoProを自撮り棒に取り付けて遺構の連続動画撮影を行い、取得した画像データに基づいて三次元モデル作成アプリケー

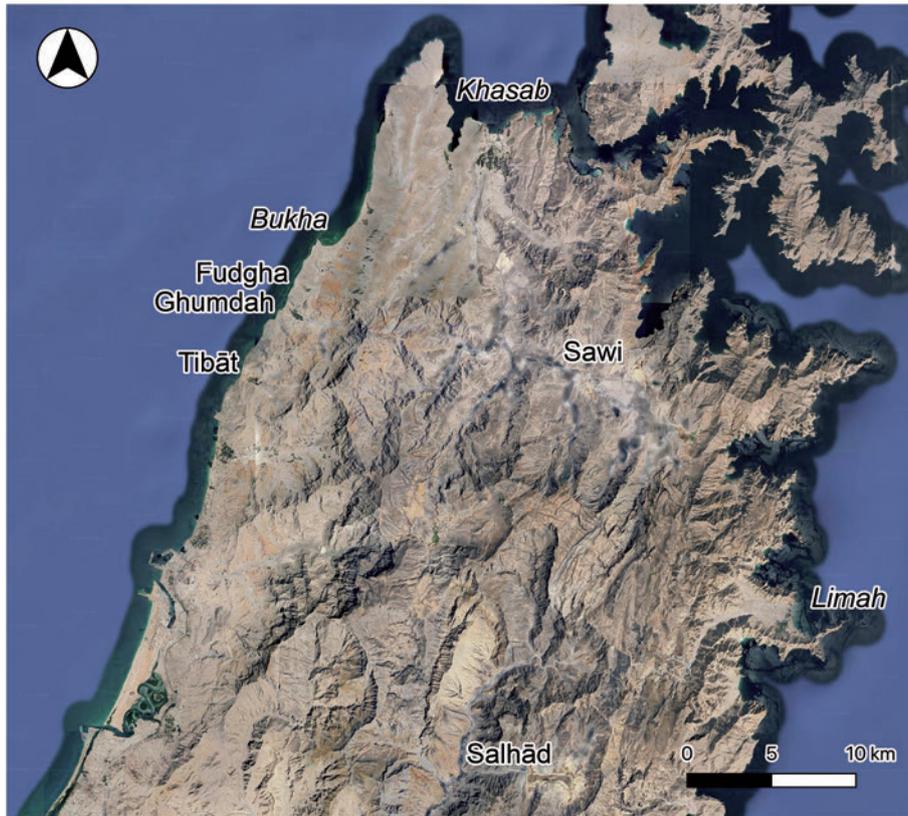


図1 ムサンダム北部地区の主な遺跡地名(黒沼太一作図)。



図2 ワーディー・グムダにおいて確認した遺跡の位置(黒沼太一作図)。

ション Metashape を用いて半自動で三次元モデルとオルソ(正射)画像を作成した(図3)。

また、ワーディー・グムダの北側斜面に、2か所の岩陰(WGD02、WGD03)を確認した(図2)。WGD02の開口部の幅は9m、奥行き7.5mであり、入り口に

は高さ1~1.2mの石壁が構築されていた。WGD03は計測不能ながら大きな岩陰で、こちらも石壁が構築されていた。どちらも地面に動物の糞が堆積しており、イスラーム後期かあるいは近年に動物、特にヤギの待避場所として用いられたものと見られる。



図3 ハラートウ・ル=ジャッダ遺跡北部居住区の一部の写真測量成果(平面オルソ画像、田邊幹太郎作成)。

4. ティバートの積石墓群

グムダの南、国境検問所にほど近いティバートでは、小山の上にかつてデ・カルディ(de Cardi 1975)が発見したものと見られる先史時代の古墳群を現認し、遺跡番号 TIB04 を割り当てた。現地で調査したところ、前期青銅器時代ハフィート期の積石墓 1 基(TIB04-01、図 4)と、鉄器時代の所産と見られる積石墓 10 基を確認できた。



図4 ティバート TIB04 墓地遺跡のハフィート式積石墓(TIB04-01、撮影者：黒沼太一)。

5. サウイの円墳

ハサブから南に 20 分ほど自動車で行き、ワーディー・ハサブ河床の舗装道路を走った先の、サウイという集落近くの道路脇に、低い円墳が 1 基、ぽつんと遺っていた(図 5)。デ・カルディが「Site 28 Wadi al-Ain」(de Cardi 1975)と名付けた遺跡と同一と考えられる。低円墳の長径は 10~12 m 程度であり、中心線に沿って長方形の板石が並んでいることを確認した。この特徴は、デ・カルディが踏査の概報において公表した図版と概ね一致する。建材となった石材は数百メートル離れた露頭から切り出され運ばれたものと見られる。縁辺部に洪水による侵食が迫っており、かつ形態的特徴の把握に困難を極めるほど遺存状況が悪化しているため、緊急発掘を実施する必要がある。

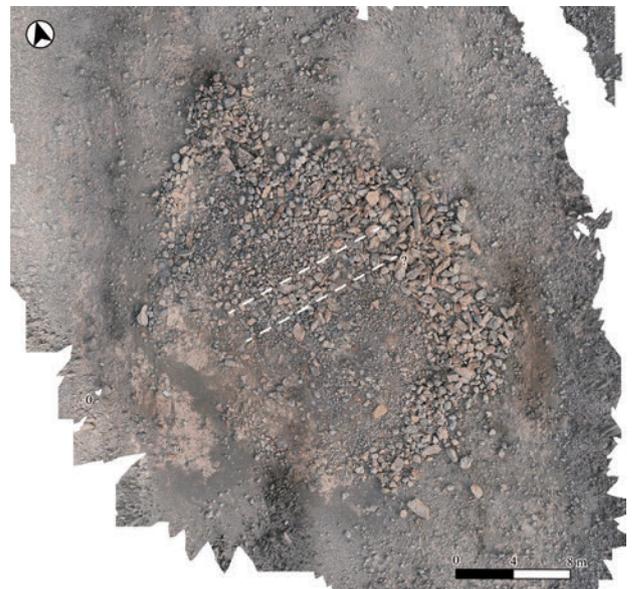


図5 サウイ古墳の写真測量成果(平面オルソ画像、田邊幹太郎作成、黒沼太一加筆)。

6. サルハード古墳群

ハサブから四輪駆動車で 1 時間半ほどルウス・アル=ジバルの峠道を走り越えると、3 本の支谷がワーディー・アル=ビイに合流する地点、サルハード(別名クドゥクドゥ)に至る。河床の微高地に、数十基の低丘状円墳と、一対の立石(シャワーヒド)をもち板石で平面長方形に囲われたボックス墓と呼ばれるイスラム期の墓群を確認した。円墳は、単独の横穴からなるタイプと、一対の横穴からなるタイプ(図 6)があり、どちらも入口上部に天蓋石を配するという特徴が

ある。パオロ・コスタがワーディー・アル=ビイで発見した墳墓で(Costa 1991: 207)、上述のワーディー・アル=アインにてデ・カルディが報告した墓と形態的に類似する。形態から、紀元前 3 千年紀頃の前期青銅器時代に属すると推定されるが、ムサンダム地方以外に同一形態の事例が報告されておらず、この地域に限定的な形式の墓である可能性がある。三次元計測と記載に着手したが、日帰り 1 日での調査には限界があった。来シーズンに万全を期して再訪し、調査を完遂する計画である。

7. むすびに代えて

ムサンダム北部のリアス式海岸は、1 年あたりに換算すると 6 mm の速度で沈降を続けているという(Wilson et al. 2014: 3729)。単純計算すると、5 千年



図6 サルハード遺跡の双横穴古墳(撮影者：黒沼太一)。

で30mになる。となると、5千年前の紀元前3千年紀をはじめ、先史時代の海岸遺跡はすべて海中に沈んでいる。このような先史沈水景観の復元が、今後の重要な研究課題となろう。対して、内陸山間部では、先史時代の古墳群を確認することができたとはいえ、まだわからないことだらけである。今後も、衛星画像判読と現地確認調査を組み合わせることにより、ムサンダム北部の文化的景観の成り立ちを明らかにすることにより、環オマーン世界、ひいてはインド洋海域世界の文化交流史における当地域の位置付けを明らかにしていきたい。

本研究はオマーン遺産観光省の許可のもと、JSPS 科研費 JP20H00026、JP21H00605、JP24H00112 によ

る助成を受けて実施した。現地調査にあたっては、ムサンダム特別行政区遺産観光局サーレハ・アル＝ファルシ氏、ヌウファル・アル＝クムザーリー氏、アリー・アッ＝シャーヒ氏、シュハープ・アッ＝シャーヒ氏らから支援を賜った。記して感謝申し上げる。

■参考文献

- ・ de Cardi, B. and Doe, D. B. 1971 Archaeological Survey in the Northern Trucial States. *East and West* 21, 3/4, 225-289.
- ・ de Cardi, B. 1975 Archaeological Surveys in Northern Oman, 1972. *East and West* 25, 1-2, 9-75.
- ・ Costa, P. 1991 *Musandam: Architecture and Material Culture of a Little Known Region of Oman*. London: Immel Publishing.
- ・ Frenez, D., Genchi, F., David-Cuny, H and Al-Bakri, S. 2020 The Early Iron Age collective tomb LCG-1 at Dibbā al-Bayah, Oman: long-distance exchange and cross-cultural interaction. *Antiquity* 95: 104-124.
- ・ Genchi, F. 2023 The Collective Corridor-shaped Tombs of the Daba Al Bayaah Necropolis (Musandam, Oman): The Origins and Spread of a Funerary Structure based on Evidence from South-east Arabia. *The Journal of Oman Studies* 24, 19-46.
- ・ Rose, J. I. 2008 Final Report on the Archaeological Survey in Northern Oman, 2008. Unpublished report submitted to the Ministry of Heritage and Culture, Sultanate of Oman.
- ・ Wilson, J. W. P., Roberts, G. G., Hoggard, M. J., & White, N. J. 2014 Cenozoic epeirogeny of the Arabian Peninsula from drainage modeling. *Geochemistry, Geophysics, Geosystems* 15: 3723-3761.
- ・ 近藤康久・黒沼太一・田邊幹太郎 2025「ホルムズ海峡に面したムサンダム半島北端の歴史を紐解く—オマーン、プハ地区における遺跡分布調査(2024年)—」『第32回西アジア発掘調査報告集』53-56頁 日本西アジア考古学会。